詩のおくりもの 2 2 2

青春の詩

長谷川龍生 編

詩のおくりもの　2

青春の詩

長谷川龍生　編

筑摩書房

詩のおくりもの　2　青春の詩

長谷川龍生

1928年大阪に生まれる。旧制中学卒業。幼ない時から強度の自閉症になり，さらに失語症におちいる。主な著書に『長谷川龍生詩集』(思潮社)『詩的生活』(思潮社)『バルバラの夏』(青土社) などの詩集がある。

1981年6月25日　第1刷発行

編　者© 長谷川龍生（はせがわりゅうせい）

発行者　布川角左衛門（ぬのかわかくざえもん）

発行所　株式会社 筑摩書房（ちくましょぼう）

東京都千代田区神田小川町2－8
電話東京 (291) 7651 (営業)
(294) 6711 (編集)
郵便番号101-91　振替東京6-4123

Printed in Japan　明和印刷・積信堂

(分類) 0392 (製品) 14002 (出版社) 4604

乱丁・落丁本の場合には御面倒ですが本社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

青春の詩　目次

I　青春時代と詩

私と詩との出会い　7
詩を読むこころ　12
詩を書くこころ　23

II　青春の詩

■青春の愛と性　31

馬鹿の純ちゃん　中桐雅夫　32

母に云う　宮沢賢治　36

長い雨　岩崎迪子　42

あなたの死を超えて　鮎川信夫　45

足　清水洋子　55

きっと便器なんだろう　伊藤比呂美　59

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

■青春の自我　67
さびしい人格　萩原朔太郎　68
青い部屋　吉行理恵　74
そこから　最匠展子　78
早朝ソフトボール大会　ねじめ正一　82
■青春の挫折　89
子供の領地　飯島耕一　90
ふるさとまとめて　高良留美子　94
バネになりたくなる　宮園真木　99

白い馬　高見　順　106

■青春の反逆　111

少年期　吉本隆明　112

空想のゲリラ　黒田喜夫　117

生涯　辻井　喬　123

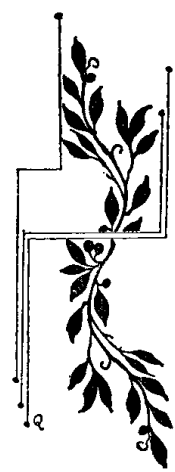
最後の箱　中野重治　135

東京帝国大学生　中野重治　137

くらげの唄　金子光晴　141

I

青春時代と詩



私と詩との出会い

私が文学の書物になじみはじめたのは、昭和十五年、小学校の六年生の時です。すでに家運が没落していて、上級の学校にいけるか、どうか、はなはだ心細いありさまでした。学校の先生をはじめ、まわりの縁者の人たちは、どこか問屋筋の丁稚小僧にでも就職するようかげながら心をくだいていたのです。

私の将来は暗いものでした。闇の中の波濤のうねりが押しよせてきていて、右も左もわからないままの少年を、大海にひきずりこもうとしていたのです。そのとき、私は、めったにいったことのない場末の小さな古本屋に立ち寄りました。それより約一年ぐらいまえに、友だちから一冊の岩波文庫を借りておりました。それは明治時代の文壇に新しく颯爽として登場した高山樗牛の『瀧口入道』です。文語調の美文で、小学校の六年生の頭脳では、とうてい手におえないものでしたが、意味不明のまま、いくたびもいくたびも、暗誦するぐらいに読みふけったものです。そういうわけで、岩波文庫という本の存在を知っており、古本屋にふと立ち寄ったのも、岩波文庫の他の作家の書いたものを目にとめておきたかったからです。

夏目漱石の『草枕』と『こころ』の二冊を乏しい財布から買いもとめました。これが文学書を自分自身で手に入れた最初の経験です。小説『こころ』には、なやましく感動しました。おとなの深淵の世界が、ぼんやりと判るような気がしたのです。今からふりかえってみますと、ずいぶん私は早熟だったと思います。

私は、大阪の木場が密集している材木問屋の長屋に住みこみ、そこの主人の世話で、昼間の中等学校に通う運命になりました。問屋の主人は親切で太っ腹でたいへんな好人物でした。将来の私を見こんだのかもしれません。

その主人の思いこみに反して、私は躁鬱病のはげしい青年に育っていきました。つねに、自分の行なっていることに疑問をもち、くよくよと、ああでもない、こうでもないと、人生の舵取りに、あやふやな考えをもつようになりはじめていたのです。原因は愛情の飢餓です。

私は、小学校の三年生のときに母親を亡くしました。それから一家離散、私のめんどうを見る人がいなくなり、あちらに預けられ、こちらに貰われたりして、居所を転々として落ち着いている場所がなかったのです。行く先、行く先で、あまりいい思いをもたれませんでした。父親はどこか住みこみで働いており、自分を救済するのがせい一杯だったようです。子どもへの愛情はほとんどありません。

どういうわけか、そのころの学校では、生徒たちに「反省録」というものを書かせてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ました。まいにち、まいにち、自身の行なったことを深く反省して、正しく清い心を養成するための日記風なものです。これは明らかに強制でした。一週間に一度、学校当局にそれを提出し、担任の教師の諫言を仰がねばなりません。

戦時中の学生生活は単調きわまるものでした。反省する材料など、ほとんどありません。まず書くことがないので弱りました。他の部分を書くことは、私生活の秘密の領域に触れることになるばかりです。ついに、その「反省録」は虚言に満ち満ちたものになりました。むりに反省することをでっちあげて、心にもない反省をやたらにくりかえすのみです。この事実はたまらないほどの苦痛でした。私は、その苦痛をやわらげるために、自由詩の形式を借りて、自身の心の動きをとらえようとしたのです。

私にとっての詩らしいものは、まいにち、何となくすいすいとできあがりました。この形式は、かなり自身の体質に合っていたようです。私は知らず知らずのうちに萩原朔太郎とか、千家元麿、佐藤春夫の詩などを読みふけるようになり、その当時の現代詩は後まわしになり、明治、大正に名をはせた多くの詩人たちの作品群に目をとおすことになったのです。詩との出会いは、「反省録」を書くのが、きっかけであり、まずその形式を真似することからはいり、しだいに詩の深い感性と意味の世界に魅きこまれるようになったのだと思います。

「反省録」に詩の形式を借りて、数週間書きつづけましたが、即刻、担任の教師から赤字

の注意書きをうけました。行わけの文章は気に入らないと言うのです。それから、紙面に空白ができてもったいないので、文章をぎっちり詰めて書けと言うのです。そのときは、実におどろき入りました。こんな馬鹿げた教師がこの世に存在しているのに腹が立ち、はげしく呪うような気持をもつにいたりました。現在でもその気持は不変です。その教師を、心の底では決して許してはおりません。

その行わけの詩らしきものを中止させられてから、私の反省録は、メモ程度の非常に簡素なものになってしまいました。まいにち、まいにち、とってつけたような、暗い気分の報告で、そして、そんな暗い気分を一掃するよう努力をつみかさねたいと、から元気なコトバをつづるのです。これには教師はあきれかえったらしく、以後、あまり赤字を入れなくなり、放任のかたちになってしまったのです。しかし、その後危険人物としてたえずにらまれていました。

中等学校の四年生の頃です。もちろん旧制の中学ですから、四年から旧制高校へいく人もおり、陸軍士官学校、海軍兵学校、予科練などにすすんでいくのが多かったのですが、戦争がますますはげしくなり、ほとんどの時間が学校からはなれた軍需工場、飛行場建設、兵器補給所の勤労動員に当てられていました。そのとき、どういう理由か知らないが、上級生全体が作文を書かされました。テーマは「戦時情勢下における学生の考え方」だったと記憶しています。私は、日頃鬱積しているもろもろの考えをいっきょに吐き出すように

作文に仕上げました。その頃、巷間では、さまざまな敗戦にまつわる憶測が流れていたのですが、その事柄も逐一みっちりと書きこんだのです。この作文は、教師間で問題になったようです。時局にふさわしくない個所には、やはり赤い線がひかれて、回し読みされたのです。とにかく教師間に注目を浴びたことは、私の得意の心を高めました。内心にんまりしたことは言うまでもありません。しかしおおっぴらには注意は受けませんでした。

ところが、私の親友のIという学生の作文が大へん評判になっていました。そしてその作品が全生徒に公表されたのですが、全文、詩的な美辞麗句で固められた素晴しいものでした。戦時下における学生の精神を、これほど、星とか、月とか、太陽とか、青空とか、あるいは草花とかをあしらい託し書きつづったものに、目を見張りました。実際に、その時、私はIという親友にすっかり物を書く上において敗北したことを意識しました。全文にいきわたっている抒情性は、私には考えも及ばない遠い夢のようなもので、実感がほとんどないにもかかわらず、人を酔わせる要素は十分に持っていたのです。それにひきくらべて、私は、自分の生活実感にたよりすぎて、そのことばかりをむりに強調しているようでした。やはり全体の調子が、暗いのです。そして暗い世の中だから、暗い事実を指摘することが何より正しいと、つねに心の一隅で思っていたのです。

戦争が終わる寸前、材木問屋も全焼し、私の居場所はなくなりました。私は動員先の兵器補給所から中等学校に復帰せずに、そのまま実社会に放り出されました。戦争が終わっ

て、偶然にも親友のIという学生が旧制高校の黒いマントを着てあるいていたのにめぐり会ったのです。私は失業者でした。それどころか街の放浪者でした。おたがいに立ち話で文学をやろうと話し合ったことを覚えています。私は、本格的に詩をかきはじめました。日々の生活の重苦しい現実の中から、詩をつくる材料をもとめて、まず具象的な表現からスタートしました。その形象化された表現と、私の対面している現実とを見くらべ、考えくらべて、表現の確かさ、つよさをつねに検討しました。

それは、現実をありのままに描き、歌うことに専念したのではなく、私の表現するものが、現実を基礎としながら現実以上を指向しているもの、現実をこえて新しい世界を示しているもの、そのように私自身だけが想像力で創りあげ構成できる現実を目ざしたのです。

暗い現実の様相は、相変わらず私の生活身辺にも漂っており、つくる作品にも、それは反映していましたが、一すじの光は射していました。それは現実を新しく見ようとする心の内側からの欲望です。

詩を読むこころ

詩を本格的に書くためには、古今東西のありとあらゆる詩人の作品を読まねばなりませ

ん。その中から一人の教師を発見し、その詩人の作詩の秘密みたいなものを習得し、私自身の血とし、肉とすることを考えました。

私も、だれしもがたどるように古い抒情詩からはいっていきました。明治、大正、昭和の十五年ぐらいまでの抒情詩はずいぶん大量に読みこみましたが、私の生活感覚にはあまり合わないのです。抒情詩でも好きなものもありますが、それにしても私の心が十分に満足しないのです。それは、私自身の青少年時代の生い立ちにおおいに関係したことであり、それでは、その当時の苦しみや、なやみを直視することはできず、逃避することになると思ったからです。苦しみや、なやみを一時的にのりこえる心の問題は、美しい、あるいは哀しいなどの抒情的な感性で間に合うかもしれませんが、それが、何だかごまかしのように思えてなりませんでした。それは、私にとってうそうそしたものであり、本当の生活を表現するには、もっともっと現実に即したナマの感性から出発しなければならないと考えたからです。つまり、借りものの感性を容易に自分の心に当てはめることをきらったのです。

詩を読むこころは万人が万人自由だと思います。読み方にもいろいろあります。しかしコトバの美辞麗句だけで、あるいは、表現のうまさだけで、読むほうが一時的に酔わされることは、トランキライザーの薬をのむようであまり感心したものではありません。

細部にわたって、青少年時代の生い立ちについて述べることは紙数が足りませんが、と

にかく幼少の頃から、おとなたちのコトバをあまりにも信じすぎて、つぎからつぎへと私の心が裏切られ、ズタズタに切りさいなまれ、この目でたしかに見とどけなければなにごとも信じることはできないと思いこむようになりました。

そのとき、日本の有名な詩人の一人で小野十三郎さんが「風景詩抄」という詩集を出され、今まで日本の詩人たちが立っていた場とは、おおいにちがったところで、作品を書いておられるのに出喰わしたのです。

渺かに遠く

渺かに遠く
それは対岸に煙っている。
誰もまだあすこに到達したものはない。
暗い海と　枯れた葦原の
あすこにゆこう。
私は長生きして
きっとあすこにゆきつくつもりだ。
川に沿うて緑色のガソリンカーがはしっている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com